

## 『ロマン派文学論』について

佐 藤 巖

さまざまな分野における批評に《現代的》という評語がよく見られるが、しかしほかならぬこの現代においてこそ、多くの場合、ことにその批評の対象が文学や芸術の領域に属する場合、この言葉は《規定語》としてほとんど意味を持たない。現代という時代は、《現代的》という言葉で何かを明確に規定しうるほどに統一的な価値観や趣味のようなものを持ち合わせてはいない。敢えてこの言葉の内容を考えようとするならば、《混沌としていて、曖昧でわけのわからない》といったほどの意味になるであろうが、たいていの場合、当の筆者の意図は別のところにあるように思われる。

同様に意味不明な場合の多いのが《ロマンティック》とか、それに類した本来ロマンティック (Romantik, romantique) に由来するはずの言葉であって、ときには《ロマンな》という、これはもう言葉そのものとして正体不明なものさえ見られる。もとより、その対象が、例えば俗にイメージ商品と呼ばれる、むしろ明確なイメージが持たれることを避けようとする、化粧品などのたぐいである場合には、何ら支障はないが、事が芸術や文学に関わる場合、不用意にこの言葉が用いられると読者に無用な混乱を強いることになり、しかも残念ながらそうした場合は実にしばしば見られるのである。もちろんそれは単に《ロマンティック》に留まらず、ゴシックやバロックやロココなどの様式史的概念、あるいは一般にあらゆる概念について同じことが言えるが、特に《ロマンティック》の場合には、ロマンティックあるいはロマン主義そのものが必ずしも容易に把握せられるものでないだけに、日常的な誤用、濫用から受ける干渉もあって、この言葉の附せられた作品、上演、演奏に対して知的に対処しようとする人びとには、この言葉が障害となりやすいのである。

このような状況のもとで、フリードリヒ・シュレーゲルの著作が山本定祐教授の編・訳によって『ロマン主義文学論』の題で刊行された（富山房百科文庫17, 1978年5月）ことの意義はまことに大きい。フリードリヒ・シュレーゲル（1772—1829）は、いわゆる初期ロマン派の代表的人物、理論的指導者として、ヨーロッパの文学や諸芸術（ことに音楽）に深い関心を寄せる人びとにその名は知られているが、従来彼の思想や所説を日本語を通して知る手だては、ドイツ文学史の書物のせいぜい数頁、ロマン派に関する書物の一章などを除けば、わずかにさまざまな人の著作を含む評論集などのなかに散在しているだけであった。シュレーゲルの著作がこれだけまとまって、しかも訳者の深い理解に基く優れた訳文によって日本に紹介されるのは、おそらくはじめてのことであろう。このような貴重な書物が一旦公にされてみると、おびただしい量の翻訳がつぎつぎと出版されてきたこの国で、まだ重大な空白があったことに気づかされて愕然とするのである。外国文学研究の専門家にとって、この種の空白を一つ一つ埋めていくことこそ第一の責務であり、この『ロマン派文学論』の場合のように、みずからの関心に導かれながら、考究と熟慮を経た訳文によってその責務を果たすことは、日本の文化に対してなしうるかぎりの最高の功績であろう。

本書には、各種のフラグメント、最も有名な『ゲーテの「マイスター」について』、『文学についての会話』のほか四編が収められており、新書版という規模の制約およびおそらくは読者の負担に対する配慮から抄訳、部分訳に留まっているものもあるが、その際の選択はきわめて慎重に行なわれていて——全訳よりもはるかに骨の折れる仕事であったと推察される——読者はシュレーゲルと彼の世代のロマン主義の理念にじかに接することができる。すべての思想家について言えることであるが、上に挙げたような略述や要約の方が原著にじかに触れるよりもわかりやすい場合が多いが、そういう記述がもとの思想を何がしか歪めるものだということは別問題としても、著者の思考の歩み、個々の言葉の細かいニュアンスは原著を見ることによるのみ知ることができるのであり、しかもそういうところにこそ思想を理解する手掛かりが宿っているのである。もとより原語で読むのがそのためには最良であるが、だれもがすべての言語に通じることは望めない以上、翻訳者の責任は重い。しかもその際、訳文は原著者の思考を正確に追うことのできるようなものでなければならず、単に日本語として読みやすいといったふうのものでは不十分である。山本教授の訳は、そういう要求に十全に応えているように見

受けられる。訳者自身が示している例で見れば、『難解ということについて』(Über die Unverständlichkeit)のなかで、『Unverständlichkeit』が『難解』と『不可解』に訳し分けられているが、一旦こう訳されてみると、まさしくコロンブスの卵で、当然の処置のように思われるものの、実は本書の訳文の全体が深い理解と綿密な考究に基いて形成されたものであり、信頼しうるものであることの一端を示している。

一般にロマン派の文学作品の翻訳においては、筆者の偏見かもしれないが、従来原文の魅力の大幅に失なわれた訳文になることが多かった。その原因はともかくとして(あるいは、ロマン派独特の語彙や語法を日本語に移すために、雅語や仏教用語のたぐいが多用されることも、その原因の一つなのかもしれない)、本書の場合には、訳者の優れた言語感覚によってそのような失敗に陥っておらず、今後のロマン派文学の翻訳の際に、一つの指針ともなるであろう。

この書物には、本文に先立って30頁近い《解題》が置かれていて、ここで訳者は《解題》という比較的謙遜な形式を保ちながら、本文理解のために必要な知識を与え、さらに読み方のアドバイスを行なっている。《謙遜な》というのは、この《解題》が決して勝手な図式を描いたり、特定の理論をふりかざしたり、さらにはある一定の読み方を読者に強要したりすることがないからである。その代り、『技巧』とか『様式』といった重要な概念や、またその言葉ばかり有名な『ロマン的イロニー』などに関して誤解を避けるような解説が加えられ、さらに「月の光を浴びた森の孤独を愛する通俗的ロマンチズム」(本書xi頁)のような、読者が抱いているかもしれない先入感を排除する作業が行なわれていて、この《解題》は、(理解しようと努力する)読者が、誤まった道に迷いこんだりすることなく、シュレーゲル的世界を一人で正しく歩めるように配慮しつつ、読者をこの世界の入口まで連れて行く理想的な手引きをなしている。

《現代的》という言葉がその規定語としての意味を失なうまでにいたった現代の混乱ぶりは、その源を尋ねればおそらく近世の初頭にまで行きつくことであろうが、この傾向が顕著になったのは、18世紀と19世紀の境目、つまりシュレーゲルをはじめとする初期ロマン派の人びとの時代であった。彼らの思想と主張、彼らの『マニール』は、その直接間接の、また賛成と反対の両面にわたっての影響を19世紀全体に(したがってその延長としての20世紀にも)与え続けるのであって、例えば19世紀の半ばごろ騒々しく登場するリヒルト・ヴァーグナー(1813—83)の『総合芸術』も、ロマン主義をぬきに

しては考えられないのである（奇妙なことに、ヴァーグナーがシュレーゲル兄弟やノヴァーリスの著作を読んだ痕跡は残されていないが）。

山本教授は、近く多年にわたるシュレーゲル研究の成果をまとめて公刊される予定と伝え聞くが、その暁にはフリードリヒ・シュレーゲルの像が日本語世界においてさらに明確になることと思われるし、それによってヨーロッパ19世紀の理解、ひいては現代の解明にも大いに益するところがあるものと期待される。しかしいまは、まずこの『ロマン派文学論』が公にされたことに対して、山本定祐教授および営業的にはまったく危険がないでもないと思われる本書の出版に踏みきられた富山房に深い敬意と感謝の念を捧げるものである。